
魔術師とそしているいろと・・・

破壊魔@希望の羽@謎の旅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術師とそしていろいろと・・・

【Nコード】

N4403S

【作者名】

破壊魔@希望の羽@謎の旅人

【あらすじ】

突然の争いに、スマブラーズの一人、とある世界の住民一人、そして三国志時代の人物が巻き込まれる！
その争いに巻き込まれた三名は、戦う事を決意。
しかし、そこは残酷な争いになりかねなかった・・・。

警告

残酷な描写がありかねません！
そしてこれは間違いなく警告として書いておきます！

戦争も混じっております！
見たくない人はリターンをお願いします！！！！

世界観

世界観についてです。

世界観は、種族の星と呼ばれる場所があります。

そこで、カー坊たちが暮らしています。

平和的反面、戦争あり。

カー坊たちがいるのは近くに戦争が起きやすいのある場所です。

極寒の廃墟、魔術都市などがあり、技術の高さは相当のものである。

人間やクローン体、義体をそのまま作り上げたりすることが可能。

しかし、それは種族の星では違法である。

許可を得たのなら違法ではなくならないという利点。

・・・という感じです。

ファンタジーの世界ですがよろしくお願いします。

追記：一部の世界、島は知り合いの作品にも出ております。
宜しく願います。

大まかすぎるキャラ紹介

キャラ紹介

- ・ カー坊・クロイツ＝ミルドラス
不思議な女性だが、真相はのちにわかるはず。
相当の化け物かと思える人物。

- ・ 秋水

医療等には抜群の人物。医者である。
元は飛行機関連だったとのうわさもある。

- ・ キャプテン・ファルコン（二次作品キャラ）
F-ZEROの一匹狼。
素早さ等が凄い人物。めっちゃ本気になると強い。

- ・ ファルサ
死神に食われたとも言われていた人物。剣の扱いは上手。
魔術ももちろん使います。

- ・ ガンナー
情報の鬼とも呼ばれる人物。元は機械だったのが人になったとの話。
情報に関しては抜群である。

- ・ 首都
情報分野での活躍をしている人物。情報では上手らしい。
恋心を抱いたりと普通の女性に見えるが、悲しんだりするとことごとく暗くなる。

- ・ 希望の羽

神様でもあると言われている人物。でもカービィ化になったりできる。

翼は出さないと不可能。とはいえ、違和感を感じないとの事。

- ・ ドクター・スチュワート（二次作品キャラ）

F・ZEROの中では珍しいレーサーでもあり医者でもある人物。本名と思しき名はロバート・スチュワート。戦場向けではないのは当然だが・・・。

- ・ 呂布奉先（二次作品キャラ）

三国志時代に活躍した鬼神。その強さ、カー坊を何度も敗北させた。まだ平和慣れしていない事などから、何があるかわからない。

その他出てきます。宜しく宜しく。

大まかすぎるキャラ紹介（後書き）

ここからは物語が始まります。
宜しく願いしますえゝ。（何様

はじまり

魔法、魔術が知れ渡っている・・・その世界。

その世界は・・・そう、戦いもあるのだ。

その戦いは、まだ知れ渡っているレベルのものではない。
いや、そうではないであろう。

一人の女性が、戦いに挑んでいるからなのかもしれない。

その女性の名はカー坊・クロイツ＝ミルドラス。

その女性は、普段から戦いに挑んでいる。

平和の為、戦い^{たかいぬ}抜いているようでもある。

それでも、カー坊はただ冷静に頑張っているようでもある。

そして、カー坊は・・・これから、もう一つの戦^{せんじょう}の地で戦う事となる。

それは、本当なのだから・・・。

カー坊

カー坊は、とある場所に居た。

そこは、種族の星、種族本部。

種族本部とは、そう、種族の一員が住む場所である。

そこに、いつものように森を探索していたのだ。

と、誰かの気配を感じ、そこに向かったのだ。

「・・・ん？」

カー坊はそのまま歩いていく。

そして、見つけたのだが、その人物は倒れていて、気を失っているようだ。

「・・・え？」

カー坊は固まったかのように、驚きを見せている。

カー坊は、如何^{どう}すればいいか悩んだのだ。

「見た目は怪^{けが}我無し・・・。しかし、この人、見覚えが・・・。」

カー坊はそう呟いたのだ。

と、誰かが現れたのだ。

「秋水、医療室に運んでくれ。」

秋水、と呼ばれた人物は納得し、その倒れている人物を抱える。

「かしこまりました。我が主殿。」

「つたく・・・最後のは呂布かあんたは・・・。」

「いえ、言いたかっただけですよ。」

「そうだな・・・。」

秋水とカー坊は、建物へと戻っていく。

カー坊は、その後冷静になり、少し考えたのだ。

「あの姿・・・どこかで・・・。」

医療室に運んで行ったのを終えたらしい、戻ってくる秋水。

秋水も、少し考えているようだ。

「ガンナー、いるだろ。」

と、カー坊。

ガンナーが現れると、ガンナーは少し考えたようだ。

「彼は医者のようなが・・・どうも、迷い込んだ人間のようなだ。」

「人間？」

「そうだ。名前はわかるだろうか？」

「・・・いきなりだな。曖昧にすぎんぞ。」

カー坊はそういうと、もう一人を召集したのだ。

それが『ファルサ』である。

かれは曲刀を持つ人物だ。

しかし、普通の剣も持っている人物でもある。

最近では『死神に食われた』とも言われていた人物だ。

「・・・どうした。」

「すまぬ。もしかしたらと思っ呼んだのだが。」

「カー坊らしいな。あの人物には見覚えはない。」

「そうか。」

「戻るぜ、カー坊。」

「ああ、すまないな。」

戻っていくファルサに、カー坊はふう、とため息をついた。

ガンナーも少し考えているようだ。

「・・・あれは、ミュートシティにもかかわっている人物だ。」

「やはりな。」

ガンナーの言葉に、納得するカー坊。

医療室に向かったのだ。

医療室（治療等の部屋のことらしいです。多分）

カー坊は不安そうな視線を、未だ眠る人物に向けた。
「・・・彼は・・・一体・・・。」
と、呟いた。

ガンナーは見て一発で分かったという。

「カー坊。」

「ガンナー、どうした？」

「・・・やはり、彼の正体が一発で見て分かったぞ。」

「・・・あの人物だろうか？」

「分かるのか？」

「多分だぞ。」

カー坊は呆れつつそう言う。

と、意識が無かった人物の意識が戻ったようだ。

「あ、気が付いたみたいだな。」

「・・・ここは・・・？」

「医療室だ。私はカー坊。」

「・・・カー坊・・・？聞きなれないのだが・・・。」

「どうやら別世界に飛ばされた意識はあるのか？」

「別、世界・・・？」

カー坊は少し考えたようだ。

「そなたのいる世界とは、かなり違う世界だ。」

「そう、か・・・。オレは・・・飛ばされたのか・・・。」

「そうだ。無理するな。もう少し休んでいる。」

その一人の人物は少し考えたのち、カー坊に視線を向けたのだ。

「・・・カー坊・・・だったか・・・？」

「そうだが。フルネームはカー坊・クロイツ＝ミルドラーズだがな。」

「変わった名だ。」

「言つな。」

カー坊はそれでも少し安堵しているのだ。

倒れていた人物が生きていたことに、とても。

そして、カー坊はふつと笑う。

「・・・そなたの名は？」

「オレか？・・・オレの名は・・・キャプテン・ファルコンだ。」

「いい名だ。宜しく、ファルコン。」

「ああ。」

ガンナーは少し考えたが、そつとその手に触れてみたのだ。

「？ガンナー？」

「やはり・・・普段から鍛えているのか。」

と、ガンナー。

「そうだが・・・オレは普段からそうだぞ？」

「・・・俺はガンナー。情報の鬼とも呼ばれているが、普段はそんなに情報を引つ張らない。」

「よろしく、ガンナー。」

「ああ。で、お前さん、スマブラーズだな？」

「！？わかるのか！？」

「分かるよ。情報の鬼だからな。」

と、ガンナー。

カー坊は恐ろしいな、と思ったが、あの人物より恐ろしくなさそうだと感じたのだ。

そう、鬼神と呼ばれし人物がいる為だ。

その人物は種族本部のどこかに潜かくれているんでいる。

いや、潜かくれているませていると言った方が正解だろうか。

そんな人物は、まだ戦場に出ていない――。

医療室（治療等の部屋のところらしいです。多分）（後書き）

鬼神で分かる人は分かりますが、呂布です。
まあ大丈夫だと信じてます・・・。

契約

カー坊は術で先ず^{まず}光での契約をする。

カー坊はふう、とため息をついた。

ファルサもいたが、不安そうだ。

「カー坊。まさか・・・。」

「そうだな・・・。か、覚悟願うつ。」

恥ずかしがるような声で言うカー坊。

契約の為に、キスをしたのだ。

少ししてから離れるカー坊。

「な・・・ななななっ・・・!？」

「あ、相棒・・・。」

ファルサはまさに乙女にとってはきついな、と考えたのだ。

カー坊は分かっている。

試練だと感じている為だ。

「・・・すまない。」

カー坊はそれでも謝罪をする。

「い、いや・・・別にいいが・・・。」

「相棒と呼んでもいいか？」

「いいぜ。」

「・・・ほんと、父上に似てる。雰囲気。」

「え？」

「父上は何者かに命を奪われたのだ。」

カー坊は、辛い気持ち^{不明点が多い}を浮かばせる。

父の最後は、記憶にない^{不明点が多い}のだから。

その為、カー坊は気になっているのだ。

「・・・私の父上は・・・予言者だ。だけど・・・死ぬことは予言されていた。」

「運命・・・?」

「わからない。父は・・・私が種族本部に来ることなど、わかっていたようだ。」

「辛い事、聞いた気がするな・・・。すまない。」

「大丈夫だ。」

カー坊はガンナーに視線を向けた。

ガンナーはそのまま去って行ったのだ。

「彼はもうそろそろ安全な場所に戻らねばならない。」

「ガンナーか？」

ファルコンの問いに、カー坊はうなずいたのだ。

「私は秋水と申します。あなたをここまで運んだのです。」

「俺はファルサ。まあ、そろそろ復帰する出番だなんて思ってるかな。だから、よろしくな。」

二人が名乗ると、ファルコンも少し考えたようだ。

「ああ、よろしく。二人とも。」

「本契約とかも、いずれ時間を追って説明しよう。」

と、カー坊は言ったのだ。

そして・・・戦いへ

カー坊は少し考えていたが、戦いを考えていたようだ。

しかし、素人である人物を巻き込みたくはない。

そういう思いが大きいのかわからないが、カー坊は困っているのだ。

「・・・訓練しておくといい。」

と、カー坊。

「分かったぜ。場所は？」

「場所はファルサにお願いする。」

「ファルサ？」

「そうだ。」

ファルサはうなずいたのだ。

「ファルコン、来てもらうぞ。」

「分かった。」

ファルコンを案内しに部屋から出る。

追いかけていくファルコン。

二人がいなくなると、カー坊は少し考えたようだ。

何も、考えていないわけではなかった。

「・・・相棒・・・。」

見ただけで威圧感を感じさせているのは、二人目だな——とカー坊は思ったのだ。

カー坊は自室に戻り、ただ仕事をしていくことにしたのだ。

それでも、不安が大きいのか、カー坊は仕事の手を時折止めてしまう。

それを見かねた人物が近寄ってきたのだ。

「カー坊様。」

「首都か。」

「はい。心配なら行けばいいじゃないですか。」

「そうだな。」

カー坊はそれでも戦いは慣れている。

しかし、突然現れたファルコンは戦い慣れしているとはいえ、戦場で敵を戦死させる事は出来ない。

カー坊は、それが心配なのだ。

そして、ガンナーからの連絡も一つ、あった。

『二人が、不死である可能性は非常に高い。何故不死なのかはいまだ不明のままだ』と。

それは、まだ誰もわかっていない。

カー坊は、部屋から出ると、そのまま訓練室に向かったのだ。

そこで、威圧感を一気に感じたのだ。

そこには、これから戦力として投入する人物、鬼神の姿があった。

そして、もう一人、あの森で見つけた人物の姿も。

二人は真面目に訓練しているが、ファルサは一人しか指示をしていないようだ。

「鬼神……。」

ぽつり、と呟き、去って行ったのだ。

そして、訓練室から戻ってきたファルサとファルコンを見て、属性を調べたのだ。

「成程、炎と雷か。炎を操れる力と、雷を操れる力はうらやましい。」

「

「そうか。ファルサは？」

「まだ戦力投入しない。鬼神はするけど。」

「鬼神？」

「そばにいたろ？」

「ああ、いたが……。あの人物は……。何か平和慣れしていないのか？」

「そうだ。」

カー坊は、少し考えたのち、

「あの鬼神呂布は……。まだ平和慣れしていない。戦場慣れはしているがな。」

と言っ
たのだ。

そして・・・戦いへ（後書き）

第一章終了です。

次は第二章となります。
では。

カード

カー坊はまず、どういえばいいか考えたのだ。

「・・・ファルサ。まだ戦場に出るなよ。」

「分かってます。」

ファルサはそのまま去って行ったが。

カー坊は警告のつもりで言うしかないな、と思ったようだ。

「ファルコン、ここでは負けてもフィギュアになる概念は無い。あと銃弾等で負傷する世界だ。」

「つまり・・・銃弾等で撃たれたら死ぬって事か？」

「そういう事になる。」

「怖い世界だな・・・。」

「しょうがない。それがこの世界の暗黙のルールみたいなものだ。」

カー坊はそれでも、あの鬼神をどう出すかにも考えているのだ。

カー坊は、光による第三契約を行い、さらに契約を強めたのだ。

「虹色になったな。これ。」

これとは、腕に装備されている腕輪の事だ。

それが、契約されたときに現れるものだ。

ピットみたいな感じだが、違うのだ。

「そうだ。薄黄色、黄色、虹色になる。」

「成程。」

「だが・・・それでも、まだ不安は大きい。」

「え？」

「そなたを、死なせない。絶対に。」

と、カー坊。

「しかし・・・そんな姿で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない。」

カー坊はそれでもその姿で戦いなれている。

姿と言ってもスカートを着込んだ普通の女性みたいな感じだが。

「・・・本契約、とは。仮契約の上で、その人以外を選ぶことはできなくなるものだ。」

「え？じゃあ・・・。」

「本契約を一発でやった私は、そなたしかできなくなることになる。」

「・・・そうか。」

「契約は、選ばれた者ができる特権だ。希望も流れ着いた一人の人物を契約している。」

と、一人やってきたのだ。

「希望か。」

「はい。あ、ファルコンってこの方なのね。」

「そうよ。」

希望と呼ばれた人物はにつこりと笑ったのだ。

「初めまして。希望の羽よ。」

「・・・初めまして。」

「そうね、ドクターって知ってますよね？」

「え？知っている限りじゃ二人いるんだが・・・。」

「その人呼んでくるわね。」

「あ、ああ・・・。」

あるカードを出すと、驚いたのだ。

「!!!!スチュワート・・・!?!」

「ご存じだったのね。彼もまた、この世界に流れ着いた人間なのだから、第二までだけど契約したわ。」

「そうだったのか・・・。」

カー坊はカードをだし、見せたのだ。

「・・・これはそなたを召喚できるカード。」

「これか。」

カードを出すファルコン。

「そつ、それだ。なくすなよ。」

「分かった。」

カードを仕舞^{しま}うファルコン。

カー坊はまだ冷静なのだが。

カードを仕舞^{しま}うカー坊。

「ドクターを召集してくれ。希望。」

「はい。カー坊さま。」

カードでまず連絡する希望の羽。

そして、召喚されたのは、まさにカードの絵と同じ人物でもあった。

「スチュワート！」

「大丈夫だったかね？」

「大丈夫だ！」

「そうか・・・。」

ふと、カー坊は考えたようだ。

ファルサの様子見に行こうと考えたようだ。

そして、歩き出したのだ。

ファルサ

風が、吹き付ける。

ファルサはその風に乗って聞ける情報を聞いていた。

生まれつきオッドアイ、そして、生まれた時からの威圧感――。

ファルサは、ぐっとこぶしを握る。

「・・・敵が・・・来ているのか。」

まだ戦場に出れないと知っていて、なお、戦場を好んでしまった愚かな行為。

それは、カー坊には知られている。

ファルサは、無言だ。

「ファルサ。」

「！な、何だ?!」

曲刀を出しかけ、その曲刀を出すのをやめたのだ。

「・・・何だ、カー坊か。」

「戦場に出たいか?」

「ああ。出たいさ。どうせなら・・・お前、もう少し本物っぽく振舞えよ。」
るまえ

「・・・え?」

もう一人現れるが、それはカー坊本人、正真正銘の本物だ。

「本物のお出ましか。威圧感の違いから、全然判るんだよ。」

「ちっ・・・。」

ファルサはにい、と笑うと、剣を出し、そのまま剣で切ったのだ。

そのまま敵を細切れにしてやるファルサ。

本物のカー坊は、威圧感がある。

隠れたと言ってもいい、威圧感が。

「ファルサ・・・大丈夫か?」

「俺だつて不死だ、死ぬわけない。」

そう、ファルサも実は不死なのだ。

未だ謎である不死の力を持つファルコン、ドクターの両名は、ファルサが不死である事は知らない。

カー坊はそれを知っている。

剣を仕舞^{仕舞う}うファルサ。

「ファルサ。」

「いや、いい……。お前こそ下がってろ。」

「分かってる。」

カー坊は去って行ったが、ファルサは辛い事を思い出した。
と、ファルコンが入れ違いに現れたのだ。

勿論彼も本物である。

「大丈夫か？ 敵が来たと聞いて……。」「

「ああ、大丈夫だよ。」

「……。良かった。」

「……。ついででいい。いずれ俺の過去はばれるんだろう。カー坊、去って行ったつもりだろうがそんなのはすぐばれるから、姿見せる。」

カー坊が姿を見せる。

^{レッドウイング}

「……。俺は、とある国の、赤き翼の一員だった。ハヤブサをあゝの孤島に追い詰めた一団さ。最初、ハヤブサが人間ではないと聞いた時、信じ難^{しんじがたかった}かった。だが、それが真実だという事を聞いて、すぐに攻撃を仕掛けようと思っていた。本人に会った時、優しい人でお酒も交わしてくれた。だから、攻撃出来なかった。もう、俺は生きていくことを考えなかった。」

「……。」

無言でその話を聞いている二人。ファルコンも、カー坊の後ろにいつの間にかいたドクターも、黙っていた。

「自害をしようとして——俺は、曲刀で自らを攻撃した。赤き血を見て、どこか不安を抱いた。そして……。俺は、自らを攻撃し、仕留めた……。つもりだった。だが……。俺はなぜか生きていた。病院に搬送された俺が聞いたのは、不死の力が入っていたことだ。

謎の液体を飲んだ記憶はあるが、それ以外はわからなかった。その液体が、不死になったのではないかと言われ、愕然がくぜんとした。それから、種族本部に運ばれ、主に会い、ここで戦う事にした。ハヤブサも種族の一員になっていたことはそこで知った。だけど・・・俺は後悔していない。きっと何かがここに来させてくれたんだと思ってるよ。」

「そうだったのか・・・。」

「ファルコン、そしてドクター。君らも、不死なんだ。」

「!？」

「あれ、まだ知らなかったのか？」

きよんとするファルサ。

二人は驚きを隠せていなかった。

「まあいい、こんな暗い過去を聞いてくれてありがとう。少し楽になったよ。」

「・・・ファルサ。本当に・・・。」

「言うな。誰かが居たら聞いているかもしれんだろ。」

「そうだな・・・。」

ファルサはにっと笑う。

「さ、そろそろ敵が来るころだ。迎撃してこい。」

カー坊はふと思ったようだ。

「・・・ファルサ・・・。」

「いいから行けよ。曲刀で攻撃するぜ?」

「分かったよ、ファルサ。」

カー坊は諦めたようで、去って行った。

残る二人も、同じくして去って行った。

ファルサは黙っている。

この過去が、どこまで己を苦しめているのかを、ファルサはまだわずかしら知らない。

戦場

戦場にたどり着いたカー坊たち。

そこは、敵と仲間が争っている。

カー坊は、突っ込んでいこうかと考えた。

しかし、二人は場数を踏んでいない。

むしろ、本当の戦争を経験していない。

カー坊は、それが気がかりだ。

しかし、カー坊はカー坊たちに接近する敵を見つけたのだ。

「これより戦いに入る！油断するなよ！！！」

「了解しました。」

カー坊は、それでもハンターをやっていた時期があった。

巨大な獲物は勿論、一人でほとんどを狩っていた。

カー坊は今でも伝説のハンターと呼ばれている。

「相棒。」

「分かっている。」

そして——あの鬼神を見つけたのだ。

「よし、居るな。では、こっちに来る敵を片付けよう！」

「了解。」

そして、戦いは始まった。

鬼神が、槍を振るうごとに戦々恐々する敵たち。

その鬼神が、にい、と笑う。

カー坊は焦らず敵を倒していく。

ドクターもFAMAS（アサルトライフルの一種。本来はFA-MASのようであるがあえてこうした。）を使って敵を倒していく。

「スチュワート、援護頼むぞ。」

「分かった、ファルコン君。」

二人は本当に息が合うな、とつくづく思うカー坊。

「さあ、負けてられないよ！取りこぼしの敵を倒すだけだからね、

今回！！わかってるよね！？」

「分かっている。我が主殿。」

「鬼神は、敵將を倒しに突っ込んでもいいぞ。ぞんぶんに暴れる。」
「了解！」

そして、鬼神呂布が行動を起こす。

あっという間に鬼神の姿は無かった。

カー坊は呆れているが。

「ステルス転移符使ったな・・・あの様子だと。」
と、呟いたのだ。

それでも、鬼神の強さは折り紙つきだ。

カー坊はそれでも取りこぼしの敵たちを倒していく。
と、敵がどよめいた。

動きが止まったようだ。

「敵將、討ち取った！」

高々に宣言する声。

その声は、鬼神呂布の声だ。

カー坊は、

「相手にならなかったな。」

と呟いたのだ。

「流石鬼神。化け物だな・・・。」
さすが

「・・・カー坊。」

「何だ、相棒。」

「鬼神呂布って誰だ？」

「彼は、三国志時代の鬼神と呼ばれた人物だ。」

「どれくらいだ？」

「私を何度も敗北させるほどだ。私も結構強い。」

「な・・・！！！」

驚くファルコンに、カー坊は冷静に、

「主の座は譲れない仕様になってるが、私が負けているのは確かだ。
仮想空間で戦ってるが、それでも勝てない。鬼神呂布は、もう化け

物だ・・・。」

「凄い奴と戦っているんだな・・・共に。」

「ええ。そろそろファルサの投入も検討してるけど。」

「あいつか。」

「ええ。」

カー坊はそれでも、鬼神の過去には触れていない。触れたら触れたで、怖くなると思ったためだ。

カー坊にとっては、鬼神呂布の強さを知っている。

呂布も、カー坊の強さは熟知済みだ。

だからこそ、わかる部分もある。

しかし、カー坊には、難点もあると感じている。

「・・・会議室に集めてくれ。」

「？カー坊？」

「ファルコンも来てくれ。私の“ある部分”を語る。」

「分かった。」

カー坊たちは本部に戻り、会議室に向かったのだ。

会議室と過去

会議室にやってきた者たちは、カー坊が現れてからざわめいたのだ。

「私は・・・実は化け物なんだ。」

カー坊の言葉に、ざわめく者たち。

しかし、カー坊は言葉を続ける。

「血が、おかしいのだ。遺伝子もだが。」

「カー坊。」

「何だ、ファルサ。」

「血は・・・吸血鬼やらエルフやらであろう。」

「そうだ。」

ファルサの質問の回答を聞いて驚く者たち。

カー坊はさらに言葉を続ける。

「見た目は人間だが、いずれ狂うのは目に見えている。」

何故狂うのかは、既に殆どは知っている。

カー坊はさらに話を続ける。

「今は主でもあり、監視されている立場だ。主なら、監視はしやすい。だから敗北されても許されている気がするのだ。しかし・・・私は、父上のように、功績を残してから、せめていなくなりたい。」

「・・・カー坊・・・。」

「だからこそ、今を生きていくことを決意した。だから、頼む。」
と、カー坊。

カー坊はそれでも強いな、と感じさせている。

しかし、彼女にも悲惨な過去がある。

カー坊は、それを思うたび、辛くなる。

カー坊は、恋人を二度も失い、自暴自棄になったこと。

そして、カー坊は命を落とそうとしたこと。

カー坊がPTSD（詳しくは検索で！）になっていた事・・・。
血の問題もあるが、その過去も辛いだろう。

カー坊は、未だにその過去の一つに答えを見いだせていない。

そう、父上という人物の、最後の事だ。

記憶が曖昧あいまいすぎることもあるが、本当は分らない。

しかし、それでも生き続けようと判断したカー坊。

「終わりにしよう。解散だ。」

「カー坊。」

「何だ？ファルサ。」

「お前、どこか辛そうだが・・・大丈夫だろ？俺たちがいるんだから。」

「そうだな・・・では、解散にする！！！」
解散する者たち。

カー坊も部屋に戻って行ったのだ。

敵襲、そして負傷 流血あり

また敵襲があつたが、カー坊たちはその場所に向かった。
廃墟は戦場としても有名な場所。

そこに、やってきたのだ。

その時だ。

風の音が、響く。

思わず、ファルコンはドクターを突き飛ばした。

「!？」

そして——何かが切れる音が、響いた。

赤い血が、切れた場所から流れていく。

「風使いだ！ 一気に突っ込むぞ！ 負傷者は治療を頼む！」

そう指示し、突っ込んでいく。

ドクターは治療術を使い、ファルコンを治療する。

カー坊は鬼神があの時、にやりと笑っていたのに不気味さを感じていた。

何を感じていたのだろうか。

「……。」

と、誰かが現れたのだ。

「カー坊、お前は突っ込まなくて大丈夫か？」

「ファルサ。ファリアが来ないよりましだろう。」

「死神から生還した俺を歓迎してくれるとはね……。」

「どうでもいい。私も戦場に突っ込む。彼らを頼むぞ。」

「分かつてるよ。そのつもりで来たんだ。」

カー坊が戦場へと突っ込むと、ファルサは風を操り、取りこぼしの敵を倒していくが、不安が大きかった。

治療が終わったようだが、多分この二人はまだ場数を踏んでないな、と判断するファルサ。

「……。」

ファルサは、死神に食われかけていたのを、一度助けてもらっている。

大怪我を負ったファルサは、その時、死を感じた。助かったのは、種族の力だと感じさせてくれた。

だからこそ、恩を仇で返すわけにはいかなかった。

「お前ら。」

「何でしょうか？」

「戦場に行くなよ。取りこぼしだけを攻撃しろ。」

「分かりました。」

ドクターの返事に納得するファルサ。

ファルコンはそれでも黙っていた。

「・・・FAMASを持て。それで撃て。」

「かしこまりました。」

ドクターはFAMASを構える。ファルコンも同様にFAMASを構えたのだ。

「不意攻撃が無いよう見張っておくよ。」

「・・・ファルサ。何故そんなに辛い顔をしているんだ？」

「・・・お前だってそういう顔だ。ファルコン。過去に何があるうが、強く生きねばならん。それを、忘れたか。」

「・・・そうだったな。」

それは、心強いな、と感じたようだ。

そして、敵は全滅した。

カー坊が戻ってくると、FAMASを仕舞う二人。

「大丈夫か？」

「何となかったけど、何か旅した方がいいんじゃないか？こうも敵が多いと、流石に不便だ。」

「そうだな・・・。極寒の廃墟でも、敵がうろついてるらしいし・・・。そこは軍に任せてるが。」

「カー坊、俺も付いて行くよ。シンが、旅したがってるんだ。」

「ファルサ。シンもつれていくぞ。」

「ああ、分かったよ。」

そして、カー坊たちは、本部に戻り、旅の準備を始めたようだ。それは、長き旅になりそうな予感がしている。

——とある戦争が、昔あった。

——その戦争で生き残ったとされる、クローン体の行方も、探しつつ・・・。

旅路

カー坊たちは、準備を整えてから、再び種族本部のグラウンドに集まったようである。

「ファルサ。まだ気にしているのか？」

「いや、大丈夫だ。カー坊、この旅は長くなる可能性がある。」

「そうだな・・・。」

カー坊は、鬼神呂布にも視線を向けるが、すぐある人に視線を向けなおしたのだ。

ふっと笑うカー坊。

「この旅は我らにとってはいいい事になるであろう。別の国の様子も見なければならぬ。盟友国めいゆうこくとしてあるミュートシティ、ポータウン、エアロダイブの三か所を重点的に見ていこう。」

その町の名を聞いたファルコン、ドクターが反応する。

カー坊は、不思議そうに視線を向けた。

「・・・もしかして、故郷の一つか？」

「そうだ。オレの故郷だ。」

「ファルコン、長居はできんぞ。」

「覚悟している。」

カー坊たちは、まず、廃墟から探索する事にしたようだ。その事を伝えたと、納得したようだ。

それから、カー坊たちは旅路に出た。

まず、廃墟での探索に入ったが、敵は見つからなかった。その後、最後の島に向かったのだ。

「おお、冬みたいだな。」

「永遠の冬だ。建物は立ち入り禁止の筈だが・・・。」

「だけど、人の気配があるぜ。」

「・・・文化財を何だと・・・。」

その先を言おうとして、止めたのだ。

敵が建物から現れた為だ。

カー坊たちは攻撃を仕掛けていく。

建物を守る為に、全力では戦っていないカー坊たち。

最後の島——そこは、後に文化財として指定されている島。

永遠の冬だが、シンにとっては懐かしく感じたようだ。

「・・・ノクラフとクローンは・・・何処いすこに・・・。」

「え？」

「いや、なんでもない。」

「・・・そうか。」

シンの独り言を聞いたカー坊は、ふと考えたのだ。

もしかしたら、ノクラフとクローンがいるのではないか。

そういう考えがあったのだ。

確かに、二人はクローン体だが、行方知れずゆくえしれずのままだ。

ぐつと拳こぶしを握るシン。

カー坊は、その様子を見て、シンに指示を出そうとする。

「・・・シン。下がちなさい。辛いなら・・・。」

「・・・ありがとう、そうします。」

シンは後方に下がる。

今のところ鬼神がかなりの数を倒してきている。

へばっている様子もない。

カー坊はにっこり笑う。

「さあ！この敵たちを倒していくよ！！！」

そう、言ったのだ。

そして、敵たちは殲滅できたのだが、シンは不安しかなかった。

もし、ノクラフとクローンだとしたら・・・という不安が。

捕まったクローン体

どこかの建物。そこに風が吹き付ける。
両腕を縛られ、ただ眠っているようだ。

しかし、その人物の姿は、本来見受けられない服装を着込んでいる
ようだ。

それは、どこか・・・ある国で言う成人式の服。
袴姿である彼は、袴を普通の服として着込んでいるようだ。
そっと、目を開く。

「・・・やられましたね・・・。」

と、聞こえないくらいの小声で呟く人物。
どうやら、彼の近くには誰かが立っているようだ。

「おい、裏切者。」

「・・・何と言っても、神の力は使いません。」

「使うまで解放しねえぞ、クローン。」

「・・・。」

クローン、と呼ばれた人物は、ただ無言になった。

彼は、神の力を使わない事からこの団体に入っていた。

ところが、その団体が、神の力を欲しがってしまったのだ。

その為、クローンは裏切ったのだが、スタンガンにより麻痺をさせ
られた。

その後、捕まったという事である。

いずれ処刑するのではないか、とクローンは思っている。

それはそれでいいが、ノクラフに会うまで、生きたい思いはある。

「ザイダ、あなたは・・・殺されますよ。」

ザイダと呼ばれた人物はにやりと笑う。

「心配しなくても、お前さんより強いさ。」

「・・・そうでしょうね・・・。ですが、鬼神がもしいたらどうし
ますか？」

「・・・あの鬼神って・・・？」

「呂布奉先。彼の存在です。戦力投入されたと、聞いております。」
ぞっとするザイダ。

どうやら、彼も知っているようだ。その恐ろしさを。

「私も、いずれ彼・・・呂布奉先に切られるのでしょね。」

「それは分らん。・・・リーダー、来るって言っておいて遅いな。」

と、誰かがやってきたのだ。

「シュレイズ・・・いえ、リーダー！」

「まだ忘れてなかったか、ザイダ。」

「シュレイズ様！大変な事実を・・・！」

「大丈夫さ。」

と、その時だ。

突然警報が鳴り響いたのだ。

シュレイズは術で去って行ったが、ザイダは黙っていた。

「・・・この騒ぎに乗じて、逃げるんだ・・・。」

「いいえ・・・ここで、死ぬのを待ちます。すみません・・・。」

「何故？」

「・・・それが運命だと感じていたためです。」

銃声も鳴り響いているが、恐怖を感じたのは、二人だ。

突然寒気を覚えたザイダ。

その時に、槍を向けられたようだ。

「や、やあ・・・。君が・・・その・・・。」

「呂布奉先さん。私は・・・死ななければならないのですか？」

と、クーロンが質問をする。

確かに、クーロンはクローン体だ。

種族ではない者だからこそ、処分を待っているのだろう。

「・・・主に聞け。」

「わかりました。」

冷や汗をかいているザイダ。

ザイダは、槍を向けるのをやめてほしいのを感じたが、死にたい思いもあった。

「あ、あの……俺、ちょっと話したいんだ。」

「何をだ。」

突然の声。

カー坊の声だ。

呂布の後ろに、現れたようだ。

「呂布。」

槍を向けるのをやめた呂布。

クーロンは黙っている。

しかし、腕には種族の腕輪がある。

種族の腕輪とは、種族の一員ではないものが装備する腕輪だ。魔術を使えるといえれば使えるのだが。

そんなクーロンだが、如何すればいいか考えたようだ。

ザードラード島での戦い中 流血あります

カー坊は、それでも冷静に視線を向けていた。

「クーロン。シンがお待ちだ。」

「え？」

クーロンは驚きを隠さなかった。

その間に、縄を切るザイダ。

自由の身になったクーロンは立ち上がるが、カー坊はそれでも冷静だ。

と、誰かがやってきたようだ。

「まさか、最後の島の隣の島、『ザードラード島』に陣取っていたとはな……。まさか、想定外だったよ。」

と、につこり笑うカー坊。

ザイダは、それでも震えていた。

と、軍がやってきたようだ。

「ご苦労、轟。」

轟と呼ばれた人物は、敬礼をする。

「かしこまらなくてもいい。」

敬礼を終えると、すぐ轟はカー坊に視線を向けたようだ。

「しかし……。あなたは我らの本拠点の主。敬礼しなければ……。」

「誰が言ったそんな事。別にそんな事しなくてもいいぞ。」

「……ルワール元帥と、コロッセオ元帥様です。」

「あの二人か。しょうがないな……。ったく。」

カー坊は呆れてしまったが、呂布は、部屋から出ようとする。

「待て、呂布。もう少し後に、そなたを戦力投入させるぞ。」

「了解。」

呂布は槍を仕舞ったのだが、銃声はまだ鳴り響いているようだ。と、誰かが部屋に入ってきたようだ。

槍をだし、向ける呂布。

「何だ、お前たちクローンを回収しにきたのかい？」

「ああ、腕にあるその腕輪、間違いなく種族に関わっているのですね。」

「

「！？」

驚くシュレイズに、カー坊は黙っている。

「シュレイズだったな。そなたを今ここで罰する！」

轟が銃を撃つと、カー坊たちは壁際に向かい、待機する。

シュレイズはよけつつ攻撃を仕掛けようとする。

轟はにい、と笑ったのだ。

「呂布っ！！！」

その瞬間、敵は切れた。

風の力に加わって、呂布の攻撃が入った為だ。

風の力は左肩の部分を、右肩の近くを、呂布が切ったのだ。

血が、流れていくのを見たクローン。

その時、過去を思い出したようだ。

「な・・・ぜ・・・。まだ・・・天下をとってないのに・・・。」

そして、呂布の攻撃は、敵を仕留めるのには十分であった。

急所を貫いた為だ。

ザイダは黙っていた。

「呂布。ザイダは殺すな。いい証言台だ。」

「しよ、証言・・・。」

「いいだろ、まだ。」

「あ、ああ・・・。」

呂布は槍を仕舞うと、クローンはただ冷静になっていた。

クローンは、腕に装備している種族の腕輪を見たのだ。

「さて、行こう。クローン。」

「はい。あなたの名は？私はクローンと申します。」

「私はカー坊だ。」

そして、カー坊たちは轟と別れると、すぐに建物から出たのだ。

シンは、はつとしたようだ。

「クローン！」

「・・・え？」

「あ、失礼・・・。俺はシン。何故か君の名も、ノクラフの名も覚えてる人物だ。どうしてかは過去にあるみたいだが・・・。」

「そうでしたか。シリアス様の過去が入っているのかもしれませんがね。」

「え？」

「いえ、シリアス様とは・・・私たちを作った人物の一人です。」
「そうか。」

とはいえ、カー坊も不安がある。

クローンがなぜ捕まったのかは、風の情報で知っている。

「カー坊さん。私は・・・。」

「分かっている。種族に入れ。そして一緒に旅しよう。」

「分かりました。」

種族にするカー坊に、シンも安心したようだ。

「そういえば・・・なぜ呂布が？」

「・・・まだ謎のままでいい。」

と、カー坊は言った。

悪魔と・・・

カー坊はそれでも、不安が大きく感じた。
その時だ。

カー坊が突然銃弾に撃たれたのだ。

「・・・！？」

クローンは驚いたのだ。

そして、現れたのは、一人の人物。

その姿は、まさに悪魔。

しかし手には銃を持っている。

その悪魔めがけて、雷で出来た雷鳴の剣を投げた人物がいる。

その剣が、悪魔の急所を貫き、仕留めたのだ。

消える悪魔。

だが、その消えた悪魔から、人が現れていた。

クローンは焦ったのだ。

走るクローン。

「あつ、おいっ！！！」

雷鳴の剣はそばに落ち、消える。

主が持っていないと消える仕組みのようだ。

クローンは倒れている人物の身を抱えたのだ。

カー坊はというと、傷は既に完治していたのだ。

再生能力も備えているのだろう。

「・・・助けてやろう。」

カー坊は術を唱え、そして、ぐったりとしている人物にかけたのだ。
その時、ぴくりとその手が動く。

「血は与えていない。彼もクローン体、悪魔に変えるのは容易であるう。」

「そんな・・・。ノクラフは、何も・・・。」

「拒否したからだろう。」

「……。」

無言になるクーロン。
意識が戻るノクラフ。

ぼんやりと、空を見つめるその視線は、うつろにも見える。

「ノクラフさん！……よかった……！」

「……クー、ロン……。」

「ノクラフさん、死んだかと思いました……！！！」

「……多分……あの時……死んだかもな……。」

カー坊は黙っている。

しかし、悪魔にされた時点で洗脳されると聞いていた。

誰が、そんな事をしたのだろうかと考えたのだ。

既に魔術都市は一つしか生き残っていない。

カー坊は、ふと、思い浮かんだ場所を浮かべたのだ。

『シュレイソードの生まれた星の隣の星』を。

その名は『ホーラ星』。

今、そこに軍を投入して調査していたりしていたところだ。

そこからやってくる人もちらほらいるが、その人たちは全て倒されている。

しかし、その星のどこかで、悪魔に出来る技術を持っているという。
それを探し次第潰していつている。星の内部の空洞があるという話もあるが。

カー坊はまずそこに軍を投入させ、潰す考えを示したのだ。

これ以上、被害を出さない為に。

これ以上、被害を出させない為に。

カー坊はそれを指示し、攻撃を仕掛けさせる。

その星自体を、潰すにはカー坊も必要だ。

いや、カー坊が居なくても、大丈夫な人物がいる。

その人物は、まだ自覚していないかもしれないが。

「彼女たちを、出すか——。」

そう、神々の中では、人を作って行った神様と、その護衛者たち――

――。

彼女たちが居れば、大丈夫だと思っている。

攻撃すれば、全部の神様を敵にする事になるのだから。

それを、『ホーラ星』のお偉い様どこるかすべての住民が知っている。

「・・・頼むぞ。」

ぼそり、と呟く。

知ってか知らずか、知らないところで何かが動いているのを聞いたのは、冒険前だ。

何か、嫌な予感でもあるのかと思っているカー坊。

だから、カー坊は警戒しているのだ。

そう、何かの前触れではないかと――。

突如の人質と、オーエン

まさにその時だ。

突然何者かが一人の人物を捕獲したのだ。

「ふふ……。私はオール。彼を少し捕まえたくて捕まえたのよ。」

「何だと……!？」

「さあ、連れていきましょう。」

言うなり魔術で連れて行ってしまう。

カー坊は焦りを見せるが、それでも、仲間を信じている。

それでも、カー坊たちは必死に探したのだ。

ある建物に近寄ってきたとき、声が聞こえた気がしたのだ。

その建物。

両腕を縛られ、オールたちをにらんでいる人物。

既に着込んでいる服はぼろぼろである。

「さあ、答えるのです！種族は何なのかを……!!」

言いつつ蹴るその人物。

苦痛のような悲鳴が、その空間に響く。

「……。」

無言で、ただ炎をまといだす。

そして、その炎は両腕に縛られていたロープを焼切る。やききる

ふらりと立ち上がる。

その背に、炎の翼が現れる。

思わず距離を取り、攻撃しようとするオール。

しかし、周りが攻撃を開始したようだ。

炎の乱舞、弾幕がその建物にいる人々を襲う。

といっても、全て敵なので問題は無いのだろうが。

その敵たちはひるまず攻撃を仕掛けようとする。

ガラスが埋め込まれていない場所から突然ミサイルが飛んでいく。

それが、敵の近くに着弾し、爆発を起こす。
無論、それで何名かが死んでいるであろう。

「!?!」

オールが驚く間もなく、ミサイルがひっきりなしに飛んでいく。
その後に、魔術種族軍隊という軍隊が突っ込んでいく。

この軍隊は、魔術に特化した軍人たちの集まりだ。

それを指揮しているのが『オーエン』である。

ただし呼び名らしく、本名は不明だが。

種族軍隊との決定的違いは術に特化した部分だ。

その他はたいして変わらない。

「大丈夫か？」

「・・・まだ・・・痛むがな・・・。」

「そうか。無理するな。俺は通称オーエンって呼ばれてる。」

「オー、エン・・・？」

「そうだ。カー坊も直^{じき}来るだろう。」

その通りで、カー坊たちがやってきたようだ。

カー坊は、少し安堵したと同時に、魔術種族軍隊が発見してくれたことに感謝したのだ。

「大丈夫か、相棒っ！」

「・・・まだ・・・痛む・・・。」

「分かった！治療を行え！直^{ただち}ちにだ！」

オールはオーエンの登場に加え、カー坊の登場にあせったのだ。

その人物をまとっていた炎と、炎の翼は消え、がくんと膝をつくその人物を抱えたのは、オーエンだ。

オーエンはにつこりと笑う。

「これで終わったね。」

「う、そ・・・。」

「敗北はもう目に見えている。負けを認めるんだ。」

既にオール以外は全滅したようだ。

ミサイルは既に飛んでこなくなっているが、オールは黙っていた。

「まだ、負けを認めるわけにはっ！逃げたらそれで私が殺される！
！！」

「まあ、種族になるなら別だよ。助けてくれる。」

「敵の情けを受け取らぬわ！！！」

そして、ナイフを出すと、突っ込んでいくが、銃弾がオールを貫いた。

倒れるオール。

「やったか……。」

「あ、相棒っ！無茶するな！」

「……すまない……。」

「相棒っ！しっかりしろっ！！！」

倒れるその人物を見て、カー坊は不安しなかった。

オーエンはすぐに指示を出し、倒れたファルコンを治療するよう指示を出したのだ。

「すまない。」

「大丈夫だ、慣れている。」

「オーエン、感謝しよう。」

「感謝されるのはこっちだよ。まさかほんとに現れるとは。」

「それが種族だ。」

カー坊はにっと笑ったのだ。

とはいえ、負傷した人物が出たのは事実だ。

カー坊は、少し考え、病院に搬送できるかどうか問いかけ、この病院は無理だと判断したため、近くの島——ファイナル島にある病院に搬送させたのだ。

カー坊は何か起きているのではないか、そう考えている。

ヴィントの過去「上」

それは、夢だと感じた。

そう、もう一人の自分がいるように思えた為だ。

雨が降り注ぐ中、腹部を負傷した人物が歩いていく。

敵はにやりと笑い、銃を撃ち、その人物の急所を貫いたのだ。

倒れる人物を見たその敵は、高笑いする。

「これで・・・これで、夢は達成できる！やったぞ・・・！！！」
そして、その後去って行ったのだ。

しかし、雨の中歩いていった人物が、倒れている人物を抱えたのだ。
「・・・なんてこと・・・。」

歩いていた人物は女性で、カー坊に瓜二つ。

倒れている人物はファルコンに瓜二つ。

それは、まるで祖先のよう。

魔術を使い、どこかの場所に移動する。

その後、一人の人物にその手に抱えている人を見せる。

「お願いします！彼を、蘇生させてください！」

「ただの人間に情でも移ったか？」

「はい、移りました。それに、彼は神様にしてほしいのです。」

「何故？」

「お願いします！」

「・・・私から言っておこう。」

「ありがとうございます！」

それで、その人物の蘇生は決まるのは少しあと。

そして、少し経過後。

ぐったりしていた人物は目を覚ます。

「・・・あれ・・・俺・・・死んだ筈じゃ・・・。」

「起きた？」

「あ、ああ・・・。何で生きてる？」

「蘇生させたのよ。」

「・・・そうか。君の名は？」

「私はヴィル。ヴィル・カー坊。」

「俺は・・・ヴィント・ファルコン。ヴィントでいいよ。」

「よろしく、ヴィント。」

「ああ。ヴィル様。」

それで、ヴィントは神様になり、ヴィルの護衛者として過ごす事となる。

しかし、宇宙に居た時。

突然襲撃があり、最初は逃げていた。

しかし、一人、また一人と護衛者は死んでいく。

だが、それでも逃げるのをやめたのは、護衛者が一人になった時。現れた敵を、攻撃しに行った。

しかし、ヴィルはその戦闘で致命傷を負い、ヴィントも大怪我を負った。

ヴィントはそれでもあきらめなかった。

無理を言わせ、攻撃を仕掛け、倒したのだから。

「ごめん・・・でも・・・私の思いは・・・あなたの心の中に・・・」

笑っていたヴィル。

そして、光となり、消えていったのだ。

ヴィントは近くの星に向かい、着地するが、痛みがひどく、その後倒れたのだ。

だが、誰かが近くを歩いていたようだ。

「このあたりに、光が降りて行ったような・・・ん？」

倒れた人物を見つけると、すぐに抱え、そばにある病院に運んだのだ。

それから少しあと。

ヴィントは目を覚ました。

「ここは・・・うつ・・・。」

痛みがして、まだ生きている事を自覚するヴィント。

「気が付いたか。」

「君は・・・？」

「我は次元の剣。じげんのつるぎ 時空の剣の対となる剣だ。」

「・・・何で人なんだよ・・・。」

「我は人間にもなれる。剣だな。」

「何故助けた。」

「けが人を助けなかったら、名折れになるからな。あと主を探しておった。我の主にならないか、ヴィント。」

「なつてやる。今や守る者はおらん・・・。」

寂しげに呟くヴィント。

それは、守れなかったからだろうか。

「詳しい事は聞かぬ。だから、無理するな。」

「分かった。」

それでも、まだ、未熟だと感じていたのは、ヴィントも同じだったのかもしれない。

ヴィントの過去―下 流血あります。

それからして、ヴィントは不思議な剣との生活が始まった。
その剣は、人間ではない。

普段は剣として存在している。

「・・・次元の剣よ。」

「どうした。」

「何故人になれる？」

「それは我でも分かん。」

剣はかたかたとしゃべっているようだ。

だが、その剣が人間となると、手伝いだす。

「変な剣だな。」

「悪かったな。」

それでも、主を守れなかった思いが強くあった。

もう少しで、自由になれたのに。

そっという思いもあった。

「・・・。」

「どうした、辛そうだぞ。」

「・・・お前になら語れそうだ。」

「何をだ？」

「過去だ。今語ろう。」

その辛い思いを語るヴィント。

次元の剣はじつと聞いていた。

最後の言葉を聞いたのだから余計なのだろうと、次元の剣は思ってしまったのだが。

「・・・そういう事だ。」

「辛かったのだな・・・。」

「ああ、主を守れなかったのもあるが。」

「主とは？」

「護衛者が守らねばならなかった人物だ。」

「我が主が護衛者なのは初めて聞いたが・・・一体誰なのだ？」

「・・・ヴィル様だ。」

「なんと・・・。戦死なされたのか・・・。」

「ああ。」

戦死という事実を知ってしまった次元の剣。

しかし、それが彼を辛くさせているのだろつと感じたのだ。

それから、何か月かが過ぎた。

とある遺跡で、ヴィントは通信を開始する。

『どうした。』

「明日で期限切れるのだろつ。」

『ああ、そうだが。』

「ありがとうと伝えてくれ。俺は幸せだったと。」

『・・・え？』

「ここで、命を散らす。ありがとう。今まで・・・。」

『分かった。伝えておこつ。』

通信を終えると、剣を自らに向けたのだ。

そして、その剣で突き刺したのだ。

血が、流れていく。

「何故死にたがる・・・！止めよ！」

「・・・すまない・・・。生きていても、無駄なんだ・・・。」

「何故だ！！！」

「・・・ありがとな。」

剣を引き抜くと、再び剣を向け、自らの手で、持っていた剣で急所を貫いた。

倒れるヴィント。

剣は人間になり、ヴィントのそばに現れたのだ。

ただ、ヴィントを抱えると、そのまま宇宙へと向かったのだ。

宇宙に到着すると、ただ次元の剣はふつと笑ったのだ。

「感じれるか？これが、彼女たちが戦って、守った場所だ。」

独り言のように、呟いていく次元の剣。

「安らかに眠るのだ……。我が主、ヴィントよ……。」「
眠るその人物の、その表情は確かに安らかな表情を浮かべているようにも見える。」

そして——ヴィントの身も、光となり、消えたのだ。

「ありがとう……。」「

ただ、感謝しなかった。

ヴィントが幸せであったことも、含めて。

未来を、信じていたのは、次元の剣だけだったのかもしれないが、それでも、ヴィントは最後の最後まで生き様を見せてくれた。

次元の剣は、感謝をしていたのだ。

ヴィント

意識が戻ったファルコン。そこがどこか分からないようだ。

「起きたか。」

自分に似た声で驚くファルコン。

「え、あ、ああ……。」

起き上がるファルコン。

痛みは感じていないようだ。

「オレはお前に似てる。声は。」

「そうなのか……。」

「オレはヴィント。どうやらまたこの世に現れる事が出来たようだ。」

「

「……ヴィント……?」

「そうだ。」

ヴィントはふつと笑う。

それは、どこか寂しげに見えたのだ。

「オレに運命でもあるのだろうか……。」

「分からないな……。」

「お前さん、ファルコンだろ?」

「そうだが……。」

「成程、オレの来世はお前か。」

「……何を言っている。」

「分からないのか?」

ヴィントの声は、確かに似ている。

そう感じざるをえない。

カー坊が現れると、ヴィントを見て苦笑する。

「よお。主さん。」

「……何だ、もう目覚めていたのか。ヴィント。」

「悪かったな。」

「相棒は？」

「目覚めて起き上がってるぜ。」

カー坊はファルコンに視線を向けたのだ。

「相棒。」

「・・・カー坊。」

「良かったわ、たいしてダメージ無くて。」

安堵しているカー坊。

カー坊はそれでも心配していたのだ。

ダメージが大きいのではないかと。

カー坊はヴィントに視線を向ける。

「どうした？」

「なぜそなたは死を選んで、生きている？」

「オレが知るか。」

最強を誇る難題
難関でもあるのではないかと考えるカー坊。

「・・・ヴィルが喜ぶぞ。」

「！ヴィル様蘇ったのか！？」

「ああ。冒険前に目覚められた。今はまだ、なかまたちのめざめ他の神の目覚めを待っている段階だ。だから・・・もう少し待たねばならん。」

「そうか・・・。」

カー坊はファルコンに視線を向け、笑う。

「退院できたら、冒険を再開しよう。ヴィントも来い。」

「分かりました。」

そして、もう一人、姿を見せたのだ。

蒼き悪魔

「大丈夫だったかね？」

「ああ、大丈夫だ。あの時は痛かったがな。スチュワート。」

「酷いけがではなくて安心したよ。」

ドクターの言葉を聞いて、カー坊もそれには納得したようだ。

確かに、あれ程のダメージがあつたら誰でもそう思ってしまう。

カー坊も不安しかなかったが、ひどくは無かった。

「ただ・・・ファルサは思いつめた表情を浮かべていたな。」

「どういう事だ？」

ファルコンはきよとしたのだ。

「過去に追われているような気がしたが・・・。彼一人を向かわせたくない。」

と、その人物が現れたのだ。

「・・・あの人物には見覚えがあつた。」

「え？」

「恐らくは・・・蒼き悪魔ブルーデビルの一員の一部だ。」

「何だ？その・・・」

「知っておいた方がいい。ファルコンたち。」

言葉をさえぎってまで言つたファルサ。

ファルサは黙っているが、胸中は辛いのだろうか。

カー坊は黙っている。

「・・・蒼き悪魔ブルーデビルは、もともと赤き翼レッドウィングの盟友だった存在。その組織

は、赤き翼レッドウィングが滅びたのを聞いて、驚いたそうだ。だが・・・それも

落ち着いていたと聞いていたが・・・まさか、こんなことをすると

は・・・。」

「・・・ファルサ。」

「カー坊、これは俺個人の問題だ。」

「それでも、今その集まりを潰す事を考えている。何か提案はある

か？」

「俺が行けば歓迎されるだろう。そこを狙って、攻める。」

「危険だが、いけるか？」

「ああ。」

そして、決行の時を待ったのだ。

それから何日かが過ぎた。

ある建物の前に、ファルサは立っている。

「やはり来ていたのですね。ファルサ。」

「きてやったよ。フレード。」

「ファルサ。此方へ。」

「分かっている。」

そして、歩き出すファルサ。

そして、最上階まで歩き、最上階にたどり着いた。

フレードはにっこりと笑う。

「私が今のリーダーなのです。」

「・・・成長してるんだな。だが・・・。」

「何か？」

「何故あんな事を・・・。」

「・・・聞いていませんよ？」

「・・・お前の仲間が、一人を攻撃してる。未だに入院中だ。」

「すみません・・・。」

「組織を解体しろ。」

その言葉を聞いて、銃を向けるフレード。

ファルサは黙っている。

「今のお前たちは、結局物理やらで解決させているだけだ。」
と、きつい一言を言ったのだ。

蒼き悪魔の滅びの歌（流血あります）

「な・・・何の事ですか？」

とぼけるように言うフレード。

ファルサはぐっと拳を握った。

「お前たちは、それで解決できるかと思っているかもしれないが、それで解決した例は無い。」

フレードの手には、いつの間にか銃が握られていた。

ハンドガンだろう。

その銃を、ファルサに向けたのだ。

「それがどうしたのですか？」

「お前たちは、ただ戦争を起こして負け戦を起こしてるのに早く気が付くんだ。」

「黙りなさいっ！！！」

銃声が鳴り響き、弾丸がファルサを貫く。

だが、ファルサは冷静だ。

「・・・そうやって・・・お前たちは、逃げるんだな。それでいいんだな・・・。」

「何故逃げるといっ！」

「・・・分からねまい。お前には。」

ファルサはあるカードでフレード以外を全滅させる。

それは、レーザー攻撃だ。

誘導弾だったのもあったのだろう、一気に全滅していったようだ。

「どうした？」

「ファルサ・・・あんた・・・。同盟に何を・・・。」

「悪いが、フレード。俺は種族の人間だ。だから、もう滅んだ組織の事を言わないでもいい。」

「死なせるしかないようだね。」

だが、その時だ。

風の音が響いたと思いきや、フレードの身に大穴が開いた。腹部辺りをえぐったのかもしれない。

倒れるフレード。

ファルサは痛みに耐えつつ、部屋から出ていく。

そして、階段を下りていた時だ。

種族軍隊がやってきたようだ。

「フレードは・・・愚かすぎた・・・。」

ぼつり、と呟き、倒れかかるが、そこを轟が支える。

「ファルサ発見、直ちに最上階へ向かえ！」

「大丈夫だ・・・最上階は、あまりいない・・・。」

その時、上の階から誰かが降りてきたのだ。

「・・・お前は・・・。」

「・・・ごめんね。」

「・・・違う。死んだはずだ。お前はクローンだろ？」

「な、何を言つて・・・。」

「俺の腕の中で死んだはずだ。あの状態で蘇生されるわけがない。」

無言になる人物。

ファルサは、意識が薄れてきたのを感じている。

「楽にしてやるよ・・・全てな。」

風の力で、その人物すら倒すファルサ。

轟は風が収まったのを見て、ファルサを抱えると、下の階へと降りていく。

そして、ファルサも安心したのか、意識を失ったようだ。

「さて、カー坊に渡さねばな。」

と、轟。

一階に下り、そして歩いていく。

建物から出ると、カー坊たちが待っていたようだ。

「ファルサ！」

「大丈夫だ、意識を失っているが生きている。」

「良かった・・・。」

「病院は・・・やめた方がいい。」

「だな。素性を知られてしまう。」

ファルサは、裏がある。

その裏がばれたらやばいのだ。

ファルサを託されるカー坊たち。

轟は再び建物に戻っていく。

ファルサを抱え、そして、森に行くと、森小屋で治療を行ったのだ。
森小屋は、廃墟ではないが人はいる。

そして、そこでファルサの意識が戻ったのだ。

神様戦 流血あります

「ここは・・・。」

「森小屋のそばだ。・・・ん？」

森小屋の向こうに民家が見える。

カー坊はそれを見つけたようだ。

ファルサは立ち上がり、その民家に近寄っていく。

カー坊たちも後を追いかける。

その民家は、人がいるようだ。

「ごめんください。」

と、声をかける。

すると、ドアが開いたのだ。

出てきたのは、若い男性たち。

何人かいるようだ。

「どうかされましたか？」

「ああ、申し訳ない。」

「おや、カー坊様。私に丁寧を使わせる必要はございませんよ。」

「え、しかし・・・。」

「いいのです。さあ、そこにいるお客さまも、どうぞ。」

カー坊たちは家に入る。

みなそれぞれ服装は同じに統一されている。

何かの修行中だったのかもしれない。

見た目は一般人に見えるようだ。

カー坊たちは部屋に入ると、カー坊は単独で民家を探索する。

ドアが開いているので、そつと中の様子を見たのだ。

その時に見たのは、禁忌とされる技に近い技の修行光景だったのだ。

しかもあの時来ていた人々と同じ服装だ。

カー坊は静かに去っていく。

その足を止めた時、誰かが近寄ってくる気配を感じたようだ。

振り向くカー坊。

その部屋から、誰かが姿を見せた。

「神様が……。」

「ええ。此方へ。」

カー坊は案内されるがまま向かう。

そして、たどり着いた時、鍵を閉めるその神様。

カー坊はふっと笑う。

「証拠隠滅か。できるかな？」

「出来ますよ。」

カー坊は攻撃をする。

カー坊はそれでも勝てる気がしなかった。

数多く現れた分身が、全部倒せたとはいえど、本体が残っているのもある。

光の球体が、カー坊を襲い、直撃する。

「が……っ……!!」

カー坊は膝をつく。

その時、壁が壊れ、そこからある人物が現れたのだ。

そして、その人物は一瞬にして後ろをつくと、神様を一撃で倒したのだ。

「化け物だな……そなた……。」

そのままカー坊は倒れるが、あの壁を壊した音が聞こえたらしい、他の人たちが集まってきた。

ある一室に、運ばせると、寝かせたのだ。

その一室は、いつの間にか来ていたマリ、ルイ、首都、そしてファルサたちのいる部屋だ。

カー坊はその後意識を失った。

「鬼神……ありがとう。」

「大丈夫だ……。」

ファルサは感謝しかなかったが、嫌な予感しかなかったようだ。

水と、ドマ

それから少し経過。

コーヒーとか飲んでいる者たち。

途中合流したドクターも不安そうにしている。

「大丈夫かね？」

「分らん……。」

クーロンは少し眠そうだが。

「クーロン、眠いのか？」

「ええ……。寝かせていただきます……。。」

「そうしろ、クーロン。」

クーロンはソファアのところまで横になる。

カー坊もまだ目覚めてはいない。

その時、爆発音が響いたのだ。

ファルサたちはそこに駆け付けたのだ。

「お、おい……。何事だ？」

「！グラリオじゃないか！どうしてここに！？」

「ばたばた音がしたから来たんだよ。」

「！まさか……。！」

一方で、何者かはまだ微睡まどろみの中にあるクーロンを抱え、台所にたどり着いたようだ。

「（……。誰……。だね……。）」

ぼんやりと、ただ薄い意識を保とうとしている。

台所にある水を使う場合は水があふれている。

どこかふたをしたようだ。

出来るようにしてあるなら話は別だろうが、本来なら不可能である。

その水のところに押し付けてしまう何者か。

苦しむクーロンに、何者かは冷酷な視線を向けていた。

一方で、ノクラフは走って探していた。

「くっ・・・！どこだクーロン！」

叫びつつ走っているのも目立つだろうとは思うが気にしない。

台所付近で水の音を聞いたのだ。

そこに向かったのだ。

そして、台所が見える位置に現れた時、倒れているクーロンを見つけたのだ。

「クーロンッ！！！」

走ってクーロンの元に駆け付けるノクラフ。

ノクラフは、クーロンの身体を抱える。

「・・・う・・・。」

「しっかりしろっ！クーロン！」

「（・・・シン・・・？）」

ぼんやりと、薄れている意識で抱えている人物を見ているクーロン。

「大丈夫か、クーロン！何が起きた！」

「・・・何者かに・・・襲われたのです・・・。水に・・・押し付けられて・・・。」

「クーロン、無理するな！」

「・・・良かった・・・あなたが・・・来てくれて・・・安心しました・・・。」

そのまま意識を失うクーロン。

「しっかりしろっ！クーロンッ！！！」

クーロンの意識が落ちただけだと確認したノクラフ。

ほっと安心するノクラフ。

しかし、不安があった。

何故、誰が、こんなことをしたのかと。

銃声が鳴り響いた。乾いた音かもしれないが、気にしていないノクラフ。

クーロンを抱え、そのままグラリオたちと合流し、休ませる事に。

「大丈夫か？さっきこっちで撃たれた者が出たからな。」

「クーロンはまだ生きてる。誰が撃たれたって？」

「そうか。・・・ああ、ファルコンが腕を撃たれてな・・・。」
「そうか。」

その時、闇の術が発動したのだ。

それは移動の術だ。

そこから現れたのは・・・。

「ド、ドマ！？まさか俺らを・・・！？」

「そんな事はせぬ。十分な証拠であろうからな。」
と、ドマ。

カマを、駆けつけてきた住民たちの一人に向けて、言い放つ。
「おぬしから、硝煙の気がするぞ。」

軽い真相（流血あります）

「な・・・何をおっしゃって・・・。」

ドマはそれでも厳しい視線を向けている。

「騙されんぞ。銃には気を感じさせるようになっておる。」

銃を出した矢先ファルコンが銃で相手の銃だけを狙って撃ち、その相手の持っていた銃は地面に落ちる。

「ならば・・・。」

闇がカー坊の身に乗っ取り、にやりと笑うその住民。

カー坊ではない闇はにやりと笑う。

だが、一人の人物がカー坊の肩をつかんだのだ。

「正氣に戻れ、カー坊！それに、お前は弱くない筈だ！そんなのに負けるのかつ！！！」

「黙りな！！！」

ドン、という音と同時に、大怪我を負うファルコンだが、それでも視線はカー坊に向けられている。

「頼む・・・カー坊・・・。お前の居場所は無いわけじゃないんだ・・・だから、帰ってこい・・・。」

その時、カー坊から闇が抜け出ていく。

その闇を、ドマが一撃で倒す。

それは、死神のカマ。

そのカマを仕舞うと、痛みに耐えているファルコンに視線を向けるドマ。

「ファル・・・？」

「戻ってきたんだな・・・お帰り・・・カー坊・・・。」

そして、崩れるようにして倒れるファルコン。

カー坊はファルコンから血が流れているのを、そこで確認したのだ。
「しっかりしろっ！相棒！死ぬな！！！」

「彼は死にやせん。ドクターも、呂布も、あの人物もそうだろう。」

カー坊と同じ事だからな。」

「そうだけどさ・・・！死んだらどうなるんだ！？」

「我にはわかる。不死であろう？カー坊も、ドクターも、呂布も、ファルコンも・・・そして、あの人物も。」

「・・・。」

黙るカー坊。

しかし、カー坊はそれでも冷静を保とうとしている。

「グラリオ、あいつは・・・劉備は、黙っていないかもしれないな。」

「

その時、双剣がきらりと光っていた。

そして、それは一人の人物に向けられていた。

「おぬしが全ての犯人だ。クーロンを殺そうとしたのも、だ。」

「何故ばれた・・・。」

「仁の道を歩む彼にとって、わかるところかな・・・。」

「剣だけなら別に大丈夫だ。」

「彼には雷属性が備わっており、斬属性もあるがな。」

ぞくつとした敵。

カー坊は必死にファルコンに治癒を行っている。

ドクターも治癒術でファルコンを治癒している。

カー坊は真剣だ。

「仁の道を歩んだ者よ、武器を仕舞うといい。そろそろ間違われる。」

「

武器を仕舞うその人物。

その少しあとに、軍がやってきたようだ。

轟だ。

「何だ・・・もう来ていたのか。劉備・・・。早すぎる。」

「それよりも・・・再生能力はファルコン、ドクター両名とも備わっている筈だ。そう簡単には死なぬはずだ。」

「ドマもいたのか。」

「そうだな。」

とはいえど、カー坊は応急処置を行っているのだが。

轟は犯人たちを逮捕する。

轟たちが去って行ったあと、カー坊たちはすぐに病院に搬送させる事にしたようだ。

心境の変化？

それからして、数週間が経過した。

カー坊は心配そうに視線を向けていた。

不安があるようにも見える。

近くには二人の武将が立っていた。

カー坊は黙って眠る人物に視線を向けていた。

「・・・相棒・・・。」

ぽつり、と呟くカー坊。

ファルサも心配そうだ。

グラリオも、ただ警戒しているようだが、どこか不安も見え隠れしているようでもある。

「・・・本当に再生能力と血の回復力あるんだな。」

と、カー坊。

「そうだな・・・。初めて聞いた時驚いたよ。」

「だけど・・・グラリオ。」

「何だ？」

「ファルサの過去を、知っているのだろう？」

「知っているが・・・やめておけ。」

「だな。」

と、カー坊。

しかし、それでも不安が大きいようだ。

と、眠っていた人物が目を覚ましたようだ。

「相棒っ！大丈夫か！？」

「・・・カー坊か・・・。」

「相棒！もう死なないで！お願い！」

「・・・努力するよ・・・。」

カー坊は泣きそうだったようだ。

それでも、カー坊は笑ったのだ。

必死に辛かった思いを、押し殺して。

「無理するな・・・カー坊・・・。」

「相棒・・・？」

「そんな辛い姿を・・・見たくは無いんだ・・・。」

その身を起こすファルコン。

カー坊はどうすればいいか分からないようだ。

「素直になれ、カー坊・・・。」

「・・・っ・・・。」

涙を流しだすカー坊。

きつと辛かったのではないだろうか、察するグラリオ、ファルサ。カー坊を見かねたのか不明だが、そつと抱きしめてやるファルコン。

「相棒・・・？」

「今は泣いてもいい・・・。辛かったら相談してもよかったんだ・・・。」

「・・・相棒・・・。」

泣きだすカー坊に、誰もが静かにしていた。

カー坊は確かに女性だ。

辛い事もあるであろう。

そんなカー坊だからこそ、支えが必要なのかもしれない。

そう考えたのは、グラリオとファルコンだ。

カー坊は殆ど、一人で生きてきて、種族に来てからも孤独に近い生活を送っていたという。

仲間はまだ信じていなかった。

カー坊は、それでも信頼できる人物を少しだけ作れたのだ。

心境の変化でもあるかもしれない。

「・・・カー坊・・・。すまない・・・。」

謝罪するファルコン。それは、辛くさせたことへの贖罪なのだろうか。

カー坊は、ただ静かに泣いていた。

カー坊が泣き止むまで、離れる事はしなかったようだ。

アリゾナの故郷で・・・

カー坊はそれでも、辛い思いはあった。

と、轟がやってきたようだ。

「皆、^{みな}無事で何よりだ。」

と、別の声。

どうやら例の人物がいたようだ。

「お前さんは本当に仁の道を歩いていたって言う気がするよ。」
と、轟。

「そうか？」

「そうだよ。」

と、轟。

カー坊は思考を切り替えたようだ。

「さて、相棒については・・・そうだな、もう少し入院させよう。」

「いや、種族本部に送った方がいい。ここも直戦争に巻き込まれる。」

「

分かった。」

轟の意見に納得するカー坊。

そして、負傷者を種族本部へと送ったのだ。

カー坊たちも、種族本部へと戻るのだが。

それでも、不安が大きかった。

カー坊は、何かの前触れではないかと。

それからして。

元気になってから、また旅を再開した。

今度は、ある場所へと向かったようだ。

そこは、歴史のある場所。

そして、アリゾナという人物が突然失踪^{しっそう}した場所。

とはいえ、戦時中行方不明になる事はある。

調べていると、棺桶を見つけたようだ。

其処^{そこ}を調べた、矢先だ。

誰かが、眠っていたようだ。

啞然とする轟たち。

意識が戻るのを確認すると、カー坊はまたぼかんとしたようだ。

「誰だ・・・君たちは・・・。」

「わ、私か？」

「そうだ・・・。どうした、驚かなくていい・・・。」

「我が名はカー坊だ。そなたは何者だ？」

「俺はアリゾナ。故郷は・・・どうなった・・・？」

「滅びてしまったようだな・・・。」

「そうか・・・。無理だったか・・・。」

と、諦めるように言うアリゾナ。

アリゾナは、はぁ、とため息をついてからその身を起こし、周りを見渡す。

と、ある人物を見て、驚いたのだ。

「俺と同じ・・・姿・・・?!」

「オレか？」

「お前、俺の元・・・？」

「？」

アリゾナはそれでも少し考えているようだ。

カー坊は、もしかして、と思ったようだ。

「アリゾナ、そなたは・・・義体^{ぎたい}でもあり、作^{つく}られた人間^{じんぞうにんげん}なのか？」

「いや・・・分らない。」

「辛くなかったら・・・教えてくれないか？」

と、カー坊は言ったのだ。

アガハとアリゾナ

アリゾナは黙ったのだ。

「・・・言えない。」

カー坊は、彼の事を尊重する事にした。
彼を辛くさせたくなかったのだらう。

「無理に言わなくていい。」

「そうだな・・・。」

ファルコンが棺桶から出してやると、立ち上がるアリゾナ。
呂布の、その手に方天戟を持っていた。

カー坊は焦りを隠せなかった。

「待て待て待て待て！攻撃するな！敵じゃない！！！」

「・・・敵ではないか。」

「そうだ。敵ではないのに攻撃したら悪者扱いになる。
納得したようで、呂布は武器を仕舞ったようだ。」

カー坊はほっと安心する。

と、アリゾナはその武器を見ていたようで、少し考えていた。

「その武器・・・方天戟という武器では？」

「知っているのか？」

と、カー坊。

「ああ。俺たちの故郷での噂によると、伝説の武器とも言われていた。」

「成程。呂布のはちょっと特殊な武器だけど、これでも方天戟の部類に入るよ。」

「改めて、俺はアリゾナ・ファルコンだ。宜しく頼む。」

「ああ。宜しく。」

と、ファルコンの後ろに誰かが居た。

「！？」

振り向いた時には、誰かが立っていたようだ。

カー坊は呆れ気味だが。

「アガハ・・・後ろをとるなというに。」

「失礼した。私はアガハ。」

「呂布と連携して攻撃するのが得意だ。怒らせるなよ。」

「私はこれでも努力を積み重ねているのでね。」

「禁句ワード教えるぞ。いいか？」

「大丈夫だ。」

「じじい、もしくはじいさんという怒るぞ。いうなよ。」

と、カー坊。

「・・・何歳だ？アガハ。」

「私はこれでも55歳だよ。」

「・・・オレより年上か・・・。」

「君はまだ若い、私のようになるまで頑張る気かい？」

「いや、それが普通じゃないのか？」

「そうだったね・・・。」

アリゾナも冷静になっっているようだ。

カー坊たちはその町から出ることにした。

アリゾナは、ふと遠くに見える城を見たのだ。

「カー坊、隣の国は？」

「軍が攻めていったらしく、滅びたよ。あっけなかったらしいが・・・。」

「なんと・・・。」

「軍相手じゃそりゃ負けるだろうな。」

種族軍隊よりも弱いとはいえど、軍は軍だ。

カー坊はその軍が減びている事を知っている。

それでも、カー坊は辛い思いはあった。

アリゾナの過去前

カー坊は、過去に二回も軍に攻められた記憶がある。
それを思ったようだ。

「・・・？」

不思議そうに思ったアリゾナ。

カー坊ははっとする。

「す、すまない。アリゾナ。」

「ところで、君たちの名前は？」

「我が名はカー坊。全てを誘う者でもある。」

カー坊が名乗る。

「俺は轟。過去に命を落としたこともあるが・・・今は蘇生されて
生きてるよ。」

「彼は呂布だ。隣が劉備。彼らは名乗る事があまりないからな。」
と、カー坊。

「ファルサだ。」

「グラリオと申します。」

二人も名乗ると、アリゾナはやはりある人物に視線を向けていた。

「オレはファルコンだ。」

「私はドクター・スチュワートと申します。」

「どうした？さっきからオレを見ているが・・・アリゾナ。」

アリゾナはふむ、と考えたのだ。

「いや・・・なんでもない。」

「もう名乗ったと思うが、私はアガハと申します。」

「よろしく、アガハたち。」

と、アリゾナ。

「アリゾナ、やはり・・・。」

「ああ。ミズーリがいたんだが、俺を封じた後行方不明に・・・。」
「封じた？」

「ああ。カー坊、過去を語ろう。」
そういうと、ふう、とため息をついた。
カー坊は真剣そのものの表情を浮かべている。
アリゾナは、それでも信じていた。
その“親友”ミズーリが生きている事を。
そして、彼の口から、過去が語られる事となる――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4403s/>

魔術師とそしていろいろと・・・

2011年10月9日00時13分発行